

# 新潟県の植物に魅せられて35年

野田 光 蔵



1989年 7月 1日

戦前、戦後を通じて26年、中国東北区（満州）の各地をくまなく調査し、そこに生育する植物に限りない愛着を残して帰国、新潟へ、早くも35年の歳月が過ぎてしまった。顧みれば、その間数多くの植物を追って県下を勢力的に調査研究を続けてきた。越後の山々は美しく、異質な植物もみられ、雪国ならではのみられない生育、形態変化もあって研究が進展するにつれ、越後の植物に対する興味、愛着は深まり、異常なほど関心を寄せるようになった。越後のすぐれた自然、植物のすばらしさ、貴重さが至る処に実在する郷土の一端を紹介してみたい。

島や雪国の人々に深い感銘を与える早春の植物は、最もよく新潟の植物の素晴らしさを表徴する。越後の厳しい冬を越した直後の可憐な花々である。これらの早春の花は、いわゆるスプリング・エフェメラルと呼ばれ、親しまれている。その代表的な植物の一つに通称雪割草（標準名ミスミソウ、スハマソウ）がみられる。この花はひっそりと咲き、俗を離れた美しさ、優しさを感じさせてくれる。この花姿には春の季節を告げる喜びがあり、人々は春の息吹きを感ずる。越後山脈の山々には、こうした風情が至るところにみられる。ことに佐渡島のは花の色がまことに鮮やかで白、微紅色、紅紫色、碧色と咲き、変化に富み、珍しく全国的に有名である。ほかではみられない美しさと清純さを備えており、野生にもこんな可憐な花があるかと思われるほど、ことにその群生しているところは、みごとである。この花の咲く頃、越後山脈の山あいや佐渡島を訪れた人々、ことに植物愛好者は口をそろえてその美しさ、可憐さを賞賛する。更に花が重弁のものもあり、また花や葉の変化に富んでおり、また花卉の大きさ、数にも変化があり学術上にも注目され、越後独特の美

しさを現出している。毎年のことながら、新春にこの清らかな花をながめていると誇らしく思われる。

県の木ユキツバキも雪解けとともに3月から開花する典型的な雪国の早春の植物で日本海側の雪の多い山地に主として分布する。雪の重圧に耐え、重たい雪におしつけられても枝や幹は折れることなく春さきに雪を割って枝をもたげ優美な花をつける低木で新潟県の気象条件に適し、花の形や色の変化に富み観賞価値が高いため、昭和41年（1966）には県民投票の結果、圧倒的な人気を博して新潟県の県木に制定された。本種は新潟県下において植生分布上極めて興味津々たる調査研究が石沢進博士によって立証された（新潟県植物分布図集）。

雪国の春は、駆け足でやって来る。4月中旬になると、今はないが加治川堤の桜は日本一であった。越後のさくらにはものがあり国の天然記念物に指定されているのが5件もある。北蒲原郡小島の梅護寺と道を隔てたところの珠数掛桜は佐渡小木の御所桜と共にサトザクラの名木で花卉数が多く、多いのは60-90枚もあり、また花房が長く花梗に長短があり、葉縁の鋸歯の先端にある芒が比較的長いことなどが特長にあげられておいて珠数のように花が連なっていて咲き揃う。越後七不思議の一つでもある。咲初めには紅色がかっているが、満開時には淡紅色を呈し見事である。

佐渡小木の御所ザクラは海潮寺の境内にある。古来より順徳上皇の御手植と言われている。黄芽で白色、一重または八重の勾桜で花びらの先端が不規則に細裂する里桜の珍しい品種である。

津川駅より約4Km、上川村野中部落の極楽寺境内にある極楽寺野中ザクラは濃紅色の大輪の美しい花を咲かせるオオヤマザクラの珍しい一変形のザクラである。野中ザクラの花は大きく、花びらも先端円くて淡紅色でなく濃紅色を呈する。野生のオオヤマザクラ（花は淡紅色）の珍しい変異として植物学上貴重なものである。

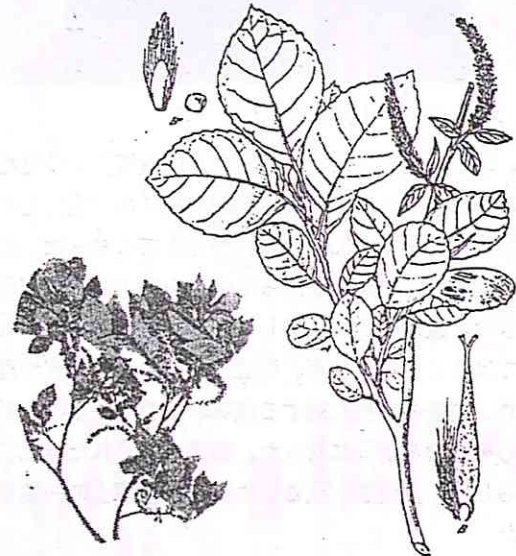
椽平のザクラ樹林は標高400mの大峰山国有林に繁茂する山桜の樹林である。山頂付近にはオオヤマザクラ、山腹以下にはカスミザクラを主とし、山裾にはオクチョウジザクラが生育する。ザクラの生育分布が高度により異なることは他では見られない植生景観である。生育するオクチョウジザクラは新潟県を中心として日本海側に分布し、かく筒の長いオクチョウジザクラの変種で花は下向きに開く。なお五泉市小山田のヒガンザクラの樹林が指定されている。桜の種類はエドヒガン（アズマヒガン）で代表的な桜の原生林で希にみる樹林として学術的に貴重なものとされている。

このような国の天然記念物に指定された越後のさくらには興味深いものがある。雪国の自然、風土によって出現する貴重な変異のように考えられる。我々はより深く郷土の植物を知り、郷土への愛着と誇りをさらに深めたいものである。離島、佐渡島は植物の種類に富み植物も仲々面白く、訪れる度ごとに深い感銘を与えてくれる。わずか 1000mそここの山でありながら、ハクサンシャクナゲをはじめ高山植物に富んでおり、しかも 100m のところまでハクサンシャクナゲが下降している。植物学的に興味あるものが多い。トベラ (*Pittosporum tobira*)、マルバシャリンバイ (*Rhaphiolepis umbellata* var. *integerrima*)、キク科ハマグルマ (*Wedelia prostrata*)、シダ植物クリハラシ、ウラジロなどは北限の分布を示し、北海道及び本州北部の海岸から僅かに報告されているコハマナス (*Rosa yezoensis*) が尖閣湾達者の海浜に群生するハマナスの中に混じって生育する。普通のハマナスそっくりで葉面は縮んでおり、茎にはあらい刺が生えておるが、花は枝端に 1 個でなく、より小形な花が数個ついていて風変わりの様相を呈する。ハマナスと平地にみられるノイバラとの雑種である。また初夏、北端の外海府の斜面に群生する佐渡のカンゾウ (*Hemerocallis exaltata*) はすばらしい景観を呈する。問題の植物の一つになっている。高山帯に咲き乱れるニッコウキスゲの海岸型と考えられ、花は橙黄色で従来のノカンゾウとは区別される。最近では山形県飛島特産の草丈の高いトビシマカンゾウ (*H. exaltata*) と同一種のように考えられている。更に分布上興味あるヤマトグサ (*Thelygonium japonicum*) は日本特産種で一科一種の珍品である。佐渡島に生育することが報告された当時、本当に生育するか否かを確かめるため牧野富太郎博士が来島したというほど、佐渡島は本種の分布上興味のあるところである。佐渡では大佐渡にも小佐渡にも生育する。関東以西の山地にみられる、多年草で茎の高さは 10~25cm あって一側に毛があり、葉は軟らかくてやや肉質、卵形で下葉は対生、上葉は互生する。4~5 月ころ、淡緑色の単性花を開く、3 個のがく片があり、雄花は開くと反巻し多数のおしべが下垂し特異な形状を呈する。原産地は土佐でハコベヤハシカグサによく似ていて樹蔭でしかも湿り気の多い所に自生する珍品である。また日本特産のケシ科の多年草オサバグサ (*Pteridophyllum racemosum*) が佐渡島金山山、大塚山、高千村、片辺から報告されている。本種は中部以北の亜高山帯の針葉樹林内に生育する希産種でケシ科の他の種類と異なって叢生する根生の葉は櫛歯状に密に分裂する。5~6 月頃に白色の花を開く。本種が本土、越後側に生育せずに離島、佐渡島にみられるのは植生分布状極めて興味あることである。

越後は、楊柳学的にもきわめて興味ある地域と考えられている。越中、越前、加賀、能登、信濃には現在までキツネヤナギ (*Salix vulpina*) は分布しておらず、オオキツネヤナギ (*S. futura*) だけで、羽前にはキツネヤナギのみ分布するが、越後には両種が分布し、しかも平野部にも高所にも生育する。両者の中間雑種とも考えられるオクキツネヤナギ (*Salix matsumuraei*, オクヤマサルコ) の標準標本の一つ

となった清水峠産 (1886年 7月19日採取) の標本は♀花で十分に熟したもので、その雌穂は基部に 2~3 コの小葉があり長円柱状で長さ 8 cm 余、包は長だ円形で灰白色、長毛があり、果は短柄を持ち卵形で灰白毛が散生し、柱頭は 2 岐する。葉は中間葉で枝端には若葉があり、下面は灰緑色で短縮毛が生え、葉柄には短灰色毛があり、後に無毛となる。葉身は広だ円形または倒卵形で長さ 9 cm で先端がとがり、波状の鋸歯、下面の毛など変異が多く、中間葉以後に縮毛のほか長軟毛があれば、長だ円状またはだ円形の葉のあるキツネヤナギの影響が考えられる。清水峠には、その変種ミヤマキツネヤナギ、オオキツネヤナギとの雑種、オオキツネヤナギとバッコヤナギの雑種などがみられる。仲々同定が難しい。

昭和 47 年 5 月 21 日、第 23 回全国植樹祭に昭和天皇両陛下をお迎えした際、明けて 5 月 22 日、御宿舎ホテル新潟で私は特に御下問の清水峠産のヤナギの標本を持参することになった。それに先立って我国柳樹学の専門家木村有香博士にお願いして日本には唯一つしかない貴重な文献の複写をして戴き、且つ御指導して貰って陛下にご覧に供した。両陛下のお温顔



おくやまさるこ (*Salix matsumuraei*)  
(清水峠産) (おくきつねやなぎ)

をまのあたり拝し、優しいお言葉に接し、只々光栄の極みでした。

日本海側のほぼ中央部に位置する新潟県には自然、風土、気象条件、地理的環境下において植物のすばらしさがあり、また興味津々たる形質変異や植生分布を示す地域でもある。雪国特有の植物には興味ある諸問題を包含し、今後の調査研究に待たねばならない。越後の自然、風土には激しい厳しさがある。ことに雪国の厳しさに耐えぬいたものには、慈愛に満ちた恵みを与えてくれる風土。それが越後であることを、しみじみ痛感する。至るところに越後の自然の不思議さを示しているように思われてならない。厳しい雪国の自然と風土の中において、我々県民に自然に対する驚き、喜びに溢れる夢を与え、我々の却下を照らしてくれる姿となり、昔から恵まれた郷土の自然、風土の再発見への途を暗示しているように筆者には思われてくる。誠に越後における植物はすばらしい。

(元新潟大学理学部教授)